新庄徳洲会病院

ピアニストが音楽療法 認知症患者さんに効果

山季講師（右）のかけ声に合わせ、手を打ち鳴らす

新庄徳洲会病院（山形県）は1月からピアニストの山季布枝講師による音楽療法を実施、8月28日に8回目を行った。同療法により認知症患者さんの表情が明るくなるなどの効果が見られることから、同院では今後も続けていく方針だ。

同院では高野良裕・初代院長の提案により、これまでも年2回ほどの頻度で山季講師と、同じくピアニストの岳本恭治講師による院内コンサートを実施。1月からは、さらに月1度のペースで本格的に山季講師による音楽療法がスタートした。

対象者は、同院の入院患者さんと、介護付き有料老人ホームのスマイル・ガーデンふきのとう、グループホームふきのとうの入所者さんなどで、毎回100人近い参加者がいる。

同療法では歌を歌う以外にも、身体を楽しく動かすためのさまざまな工夫を凝らしている。たとえば、『あんたがたどこさ』の歌では歌詞の「さ」の部分で楽器を鳴らす、『幸せなら手をたたこう』の歌では歌詞どおりに手や足をたたくといった具合だ。

療法のなかで使用する音楽は高齢者がよく知る童謡をベースとしているため、難しく考えずに参加できるのが特徴。山季講師は山形県の民謡なども同療法に取り入れており、なかには昔を思い出し、涙を流す患者さんもいるという。

参加した患者さんは、「リズムのあるかけ声のなかで、緊張しないで楽しむことができました」、「もっと回数があってもいいと思います」など好評だ。

実際に、これまで反応の乏しかった認知症患者さんが楽器を鳴らそうとする反応を示したり、同療法後も患者さん同士で会話が弾むようになったりと、さまざまな効果が確認できている。

患者さんたちは生き生きとした表情で楽器を鳴らしていた

成田政彦事務長は、「音楽を通じて前向きな気持ちになることが、治療にも良い影響があるのではないでしょうか」と同療法への期待感を示す。ドイツをはじめ欧州では音楽療法を治療法として取り入れている国が多く、同院も積極的に実施していく方針だ。次回は9月24日に行う予定。